

丹波国分寺とその前史

奈良時代、聖武天皇・光明皇后は仏教に深く関わる政策を遂行します。本来、天皇は神であり、釈迦の教えである仏教とは相反するものですが、平城京での天然痘などの疫病が続き、自身の健康不安、ながやおう長屋王の変などの政治の不安定を取り除くために仏教を手厚く保護します。聖武天皇は天平15(743)年、紫香楽宮でしがらきのみや盧遮那仏るしやなぶつの金銅像の造立を宣言します(大仏造立詔)。仏教の力によって安寧あんねいをもたらすという願いをこめたようです。紫香楽宮での大仏造立は実現しませんでした。紫香楽宮・恭仁宮・難波宮を経て、平城宮に戻ったのち、聖武天皇は平城外京の東、金鐘寺に大仏を造立し、天平勝宝4(752)年に大仏開眼供養を行いました。以後、この寺が総国分寺としての東大寺となり、天平13(741)年2月、聖武天皇は諸国に国分寺・国分尼寺の建立を詔します。ただ、天皇が思うようには国分寺・国分尼寺の造営が進んでいなかったようで、後に何度も国分寺・国分尼寺の造営を進めるようにとの詔がでています。

京都府の場合、旧国として山背国、丹波国、丹後国がありますが、



丹波国分寺跡の塔礎石

「恭仁宮の四至」で記したように、山背国分寺は恭仁宮の大極殿せにゅうを施入して造られました。

丹後国分寺は宮津市府中、京都府立丹後郷土資料館付近にあったと思われます。現在、史跡丹後国分寺跡として建武元(1334)年に再建された礎石群が残さ

れています。

丹波国分寺・国分尼寺は発掘調査が行われており、その周辺を含めて当時の様子がわかりつつあります。

丹波国分寺は、亀岡市千歳町国分に方二町の寺域をもち、東に塔、西に金堂を並べる法起寺と同じ伽藍配置です。その西方約 400 m



丹波国分寺に瓦を供給した瓦窯跡（三日市遺跡）

の河原林町河原尻には、およそ一町半の寺域をもつ丹波国分尼寺が建立されます。丹波国分尼寺は、南から南門・金堂・講堂・尼房を配置する東大寺式伽藍配置です。

亀岡盆地では山陰道沿いで国分寺・国分尼寺の建立とともに、国府と判断される池尻遺跡^{いけじり}で大型建物が建てられ、大きく開発が進められました。国分寺の造営の際には、北方約 1.4km の三日市遺跡^{みっかいち}で創建時の瓦が焼かれ、水運（運河）を利用して国分寺へ運んでいました。奈良時代の山陰道は、丹波国分寺・丹波国分尼寺間を北上し、千歳車塚古墳^{ちとせくるまづか}の西側を通り、現在の亀岡市馬路町池尻に至るとされています。河岸段丘や扇状台地上に並ぶ両寺の様は、周辺の集落からはひときわ大きく見え、山陰道を行き交う人々にとっても、律令国家の威厳を示すものであったと思われます。

丹波国分寺や丹波国分尼寺が建立された付近は、多くの古墳（国分古墳群^{こくぶん}）が築かれていました。中でも国分 45 号墳は、八角形墳に復原することができ、土器や金属製品など多くの副葬品の中に銀装の大刀がありました。墳形や副葬品から飛鳥朝廷と深く関わる地域首長の墓と考えられ、このような基盤が律令国家に移行し、国分寺建立に深く関わったと思われます。 （岡崎研一）